
モノクローム

八音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクローム

【Zコード】

Z5573M

【作者名】

八音

【あらすじ】

ボクの家には3つ上の琴美と言う女の子が住み着いている。
喜怒哀楽のないボクとは対象的な活発な彼女。

上京したての頃に知り合いずっとボクの事を気にかけてくれていてボクの事を好きと言つてくれているのだがボクには人とは付き合えない理由があつた。

モノクローム

ボクには喜怒哀楽が無い。

幼少時代には存在した。

そしていつ頃から無くなつたのかも。

正確には無くなつた訳ではなく表に出さない事があたり前になつたと言つのが正しい表現だ。

ボクは人と深く付き合つた事が無い。

深く付き合つて最後に言われる言葉をボクは知つているからだ。

『あなたは何を考えてるのか分からない

』
『ちよつと洋平……今日いそはどつか出かけるんだからね……』

パソコンに向かい「コーヒーを飲んでいるボクに聞いかける

『どうか行きたいなら一人で出かけてきなよ』

『一人で出かけたって面白くないでしょーーー。』

ベットの上でダダをこねる様に騒いでる彼女の名は琴美。

彼女は以前ボクが働いていたBARと一緒に働いていた3つ上の先輩だ。

上京したばかりのボクはまず「飯に困らない仕事と考えて飲食店を選んだ。

そこで知り合った彼女はやけにボクを気にかけてくれたのは嬉しいのだが、

飲食店の活発的な雰囲気がボクには合わず、一年もせずに辞めた。

『別におれと出かけたって楽しくねえだろ?』

『んな訳ないでしょーーー楽しいから一緒に居るんだもん』

前から琴美はボクと一緒に居る事を乐しいと言つてくれるのだが
はつきり言つてボクには理解出来なかつた。

会話のネタが豊富な方でもなれば
ボクから話しの話題を振る事なんて殆どない。

ずっとパソコンに向かっているボクに一步的に琴美が話しかけて来て
ボクは相づちを打つては琴美が騒ぐ

それでも琴美は絶対に

『何を考えてるのか分からない』

と言つセリフを言つ事はなかつた。

そのセリフを言われないだけでもボクにとつては居心地がよかつた

『わかつた！…じゃあ一時間だけ出かけよう』

『、、、何がわかつたんだよ？』

『どうせ人混みがキレイだから出かけたくないんでしょ？

だから今日は近くの公園に散歩しに行こう』

『、、、』

人混みがキレイだから出かけたくないのは図星だ

『さあ！早く着替えて着替えて』

『公園を散歩してなんか楽しいの？』

『手繫いでお散歩だなんて凄く楽しいじゃない！！
そんぐらいなら付き合つてくれてもいいでしょ！？』

『え、ええ、まあ、、、そんぐらいなら』

そう言つていつも一時間で帰つて来れない事をボクは知つてゐる

過去を知りたがる

『ただいまあ～！～いやあ～楽しかったね～、ボート～～』
『やうだね、～、～』

結局今は水池のある公園まで出回をボートを漕がせられたがめとなつた。

『また行きたいね』

『や、そうだね』

『こつも家でパソコンばつか弄つたら体なまつやけいつよ～たまには体使わないと』

『あたそのやる気のない返事して～』

『別にやる気ないわけじゃ、～、～』

『なんて直つか洋平には霸氣がなこのよね～～霸氣が～～』

『別に霸氣出やうとなんてしてね～』

『男の子なんだからシャキッてしなさいよーシャキッと』

『今日はボートまで付き合つたんだからいいでしょ』

『そうね。凄く楽しかった！ありがと』

『楽しかつたんならよかつたよ。それで』飯にでもしますか
今田は何食おうか？』

家に着き荷物を片付けベランダで一服してボクは聞く？

『やうねえ～ほんじゃあ今日はパスタにしようか』

『あいあこわあ～』

そう言いボクは鍋に火を付けお湯を沸かし始める
BARで働いていた時にキッチンだったボクはある程度の料理を教
わった。

昔から絵を描いたり工作したり何かを作ると書く事は好きだったの
で料理は結構好きだった

一人で集中出来る事は基本的に好きな性格なんだろう

そんな感じでいつも「飯の支度はボクが担当していた

『ねえ～洋平？』

部屋とテーブルの片付けを終えた琴美は
ベットでくつろぎ雑誌を読みながらボクに問いかけた

『ん?』

『洋平つて出でたりがじやなことみね?』

『へへへ、せうだね』

『なのにあまり方言でないよね?』

『やつや いひに来てだいぶ経つ』

『いひに来たての時からあまり出でなかつたよ』

『やつへじやあ順応性が高いんだね』
またこの会話か。そう思しながら答えた

『ビリ出身なの?』

『別にビリでもいいでしょ』

『やつやつてこつも洋平は自分の事語れないとね』

『別に過去の事なんて知つたつて知らなくたつてどつちでもいいだ

る』

『なんでそんなに自分の事話したがらないの?』

『別に話したくない訳じゃないけど』

『じゃあ話してくれたつていいじゃん!!』

それともあれ?過去の事知つたら私が洋平の事キライになるとでも

思ってるの?』

「別に嫌われたくないからとかじゃないよ」

『じゃあなんでよ?』

『なんでもいいだろ』

『聞かれたらまずい事でもあるの?』

『別にないけど』

『じゃあ話してくれたつていいじゃん！』

利洋平の出身地どこかなんて上京して来たのかとか家族構成とかなんも知らないんだよ

『よしわかつた。じやあその質問すると琴美をキレイになる』

『ああ～！～またそれだあ～！～』

۲۰۷

「ちようど良くなつた」と、ボクは喜んで言つた。

『はい、またそれですよ。』

もう『飯出来るからテーブル準備して』

『いつもやつやつて話を誤魔化すうーーー』

ベットでジタバタしながら渋々テーブルにアイスティーを準備する

琴美

『はいはい、また誤魔化しますよ～』

「ソシニクの香りが漂うフライパンにパスタをサッと絡めて手際良くお皿に移しテーブルに運んだ

『はいはい』飯はおいしく食べないとバチ当たるからわざわざまでの話題は終了お～』

『はあ～い

ふて腐れた顔で渋々頷いた

『先食べていいよ。俺一服してから食べるから
そう言い喫煙場のベランダへと出て行った

ボクは必ず『飯の前に一服をするのが習慣となつていて

ベランダから部屋に入るとおいしそうにパスタを食べている琴美が
いた

『おいしい？』

『うん！洋平の作るペペロンチーノ大好き』

『それはよかつた

早くボク以外でおいしい』飯作ってくれる人見つけてね
そう心でつぶやきボクもパスタを口に運んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573m/>

モノクローム

2010年10月17日02時34分発行